

變の春なれば、現在未來の隔てなく遍一切處の春
あれば、遠く西方天國に求むるに及ばず、貴賤貧
富の別も無く、常位即妙商は算盤をとり、農は鋤
鍬をとりて常に春の光りに飽く事が出来るのであ
る、法華經には之を説いて『及び余の諸の住處に
あり』と云ふ。

久遠本時の別風光嚴然として個々の眼前に在り
人間の春夏秋冬は悉くみち寂光の春を飾る一色彩
山野河海咸く満目の花からざるはなし、大聖人更
に之をわしへて、

『されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れ
の處にても候へ常寂光の都たるべし我等が弟子檀
那ごならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見
本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふことうれしとも
申す計りなし』等と仰せられた。

宇宙をすべて靈化し、一切を舉げて活動せしむ
る本時寂光の春人はこゝに入りて深大なる意義を
覺り、國は此處に到りて社稷の利福を益し、世は
これに逢ふて真正の平和を得るのである。世の人

々々疾く長夜の眠より覺めて麗らかなるこの寂光
の春色に逍遙せよ!!

心の私語

深山木生

降るはく、どんよりした天氣は、いつか細か
き白塵ごちて落ちて來た。深い霧がかゝつたよう
に向ふは煙つて居る。鹿の子班の様に點々として
新年第一日に降つた雪の名残を止めて居た。遠山
も見えずあつてしまつた。此の雪に驚いてか、名
も知れぬ小鳥は、ピー〜と囀り廻つて居る。い
つも噪々しい朝も、今日はわつとりとして靜かだ
ある。私は、今自分の部屋の窓を開けて、机に寄
りながら、此の珍らしい雪の朝を眺めて居る。何
處からか朝勤の木鐘の音が、いと靜かな空氣を破
つて、何かしら自分の心の奥に潜んで居る何物か
をそゝり立てる様に響いて來る。

古い教場で、大工が、

『ヤア、今日は雪だかア』

と云ふ聲が木を削るチャウナの音に和して聞えた。それについて、復誰やら、

『今日一日降るといゝなア』

と云つた。

わや／＼見て居る間にもう鹿角の様に立つた雑木の小枝は、白く化粧した。誰かマントを着て下の道を通つて校門へはいつた。其の後に、一ツ／＼足趾は印せられて行つた。此の雪……降りしきる雪を見る人……各自が其感を異にするであらう。

雪よ！ 雪はなせ白いのか？ 雪それ自身の心は實に潔白なものであらう。否、清くなければならぬ。さればこそ、かく白色を現はして居るのだ。又平等の性も持つて居る。だから野も、山も、木も金殿玉樓も、賤が伏屋も皆一樣に、白皚々たる世界と化することが出来るのだ。かくてこそ雪は何人からも雪よ雪よと稱へられるのである。

『ア、雪よ!! 汝は我々の好同伴である。余等は汝の如き飾りのない、偽らさい、潔白な、眞の信

仰を以て、上、佛祖三寶並に宗祖にかしづき奉り、不偏の平等の慈悲を以て、下、一切衆生を愛撫し、救助し、汝が不淨な世界を覆ふて銀世界とするが如く、清い寂光土と化するであらう。汝の潔白と平等とは、我々日蓮主義者の好摸範者として愧ぢないであらう。』……此は余の心のさゝやきであつた。私は禱る、雪が永久に白く清さが様に、吾心も亦潔く、不變に、永遠に清い眞の信仰を續けんことを。

雪は猶降りしきり、萬年の操を保つ若松は、はにかんで、さしうつむいた。

下の校舎から、始業の鈴がツン／＼と重くるしい空気を破つて鳴り渡つた。

と、一羽の小鳥が飛んで来て、前の木に止つた。すると、枝に支へられた雪は、音も無く舞つた。

復依然として、静かなタイムは續いた。